

平成 24 年度第 2 回鎌倉市図書館協議会会議録

日時： 平成 24 年 10 月 23 日（火）14 時～16 時

場所： 鎌倉市中央図書館 3 階多目的室

出席委員：田中委員長、杉本委員、阿曾委員、増井委員（兵藤委員欠席）

事務局：古谷館長、湯浅、中田、浅見、松石（以上館長補佐）、佐藤係長、津田

記録：津田

これから開会します。

田中委員長：これより平成 24 年度第 2 回目の鎌倉市図書館協議会を始めます。委員の出席状況について、事務局から報告をお願いします。

湯浅：兵藤委員より欠席の連絡がありました。協議会委員会規則、委員の定数に達しておりますのでこの協議会は成立しております。

田中委員長：傍聴の方いらっしゃいますか、事務局よりお願いします。

湯浅：傍聴者 4 名いらっしゃいます。入っていただいてよろしいでしょうか？

田中委員長：お願いします。

—傍聴者入場—

田中委員長：傍聴者をお願いします。会議中は静粛に、意見発表はできません。資料は退出時に事務局にお戻し願います。

では、議事に入ります。報告事項アについて事務局よりお願いします。

古谷：着席したままで失礼します。9月に市議会定例会がございました。9月は毎年前年度の決算審査が行われるので合わせて報告する。資料はありません。常任委員会で第二次鎌倉市子ども読書活動推進計画案作成が整ったので報告した。現在、パブリックコメントを求めている。担当館長補佐から後ほど説明する。その中で4名の委員から質問があった。ネットワーク鎌倉の石川（敦子）議員、市民委員を3名公募で募集して加わってもらったが、その意見集約について。高橋議員からは学校図書館の蔵書の数、文科省の基準に達していないところがたくさんあるのでは、明らかにすべきとのご意見。蔵書の数より使われる図書、質の方に着眼点をうつしていると回答している。納所議員からは、情報収集と発信していく力を活用して。大人の読書環境すら悪くなっている、もっと外に打って出てほしい。久坂議員から、子ども会館子どもの家の蔵書について、どう対応しているかとの質問。市民からいただいた図書のうち、使えるものを中心に提供して連携を図っていると答弁した。やり取りしながら推進計画内容についてはおおむね了解をいただいた。

平成 23 年度の決算審査について、残念ながら不認定という形になっている。9月議会では3名から図書館について質問を受けた。高橋議員から、鎌倉駅のブックポストについて、駅の外に出さないのかとの質問があり、9月から出していることを説明。クラウドによる電子図書館を進める考えはとの質問に、電子図書館は実証実験までやった経過

があり、クラウドの導入もシステム更新に合わせて考えていく問題だと答弁。共産党の高野委員、図書館法の精神にのっとり図書館を運営していただきたい、専門職の配備などやってほしい。納所議員から、図書館振興基金の収入状況について質問があり、23年度で12万円程収入をいただいたと答えた。以上です。

田中委員長：ご質問ございますか？ご意見は？

増井委員：発信する力について、サービス計画にある「鎌倉ならでは」の図書館、この間の議事録に、業務としてやりますとある。業務なのかサービス計画なのか。業務であるならどう予算をつけてもらうか、人をつけてもらうか、やり方ある。両股かけているのか？

サービス計画の方針にある1番と3番、これはどの図書館でも取り上げられているテーマです。前の計画策定は12年前で、前と同じことを言っている。やはりリセットしてやるのだから、鎌倉ならではとか、発信する力、人、物など、新しいことを言っていくべき。経営のリソースはどうするか、保証されないのに理念とか言っても、12年経ったら一緒だったということにならないか。わたしは経営学をやっていた。人、モノ、金、情報、図書館経営学としての観点が欠けているのでは。さびしいというか、鎌倉ならではという感覚が出てこないのではと思う。そういう感覚でございます。

田中：ほかにございますか。

古谷：ご意見として承らせていただく。業務として情報の発信をしていくということについて、増井委員のご意見は、業務とサービスが違うんだというお話のように聞いたが、私は業務＝サービスと認識している。増井委員と考え方が違うのかなという印象をもった。

増井委員：前回の議事録の最後の方に、業務として、と書いてある。業務であるなら予算申請して、正々堂々と訴えて人、モノ、金、どんどん推進していくべき。業務とサービスは同じ？あまりかみついてもおかしいが、どちらでも取れるように？12年間同じならおかしい。議事録の一番最後、17P、次元が違うんなら次元が違うで、サービス計画と業務はどういうふうにかかわって、市に対するアクションをどうされるのか、かなり曖昧模糊とされているのでは。図書館としてはやりたいんだというふうに出して言った方がよい。

こういう流れからいくと混在していて分かりにくい。

古谷：誤解されているようなら間違いかと。業務ということと、サービスは一体と理解している。サービスを提供することが図書館業務。情報発信を業務としてやるのは当たり前のことと理解している。増井委員さんがおっしゃるように、サービス計画の中身が業務とは違って、経営の視点で人、モノ、金、そういったものをマネジメントしてやっていくべきということは重々私も少しは勉強したことがあるので承知している。業務としてやるにはマネジメントをやっていけ、というご指摘かと思うということ、ご容赦い

ただきたい。姿勢は変えたくない。業務としてサービスをやっていく。

増井委員：業務なら業務で、市の上の方に「こうやりたい」と言わないと。

古谷：おっしゃる意味は承知している。業務としてやるからには上に伝えていけというご指摘だと受け止める。すべて業務として把握している。サービス計画も。マネジメントも上のほうに反映させろということ、受け止めさせていただく。

田中委員長：報告の通り了承する。
続いて、イの図書館協議会委員選考について報告を。

湯浅：進行状況の報告だけさせていただく。市民委員の募集は終わりました、書類審査レポートを見て審査をさせていただき、委員長は教育部長、次長、教育指導課長、中央図書館長、中央図書館館長補佐4名がレポートに点数をつけまして、31日に選考委員会を開催する予定になっている。市民委員についてはそこで決める。正式に言うと教育委員会で決めるので候補者を決める形。社会教育関係については、社会教育委員会に推薦を依頼した。学校教育関係については、校長会に依頼を。有識者という形、鎌倉女子大にお願いをしている。今回新たに作る家庭教育関係の委員について、いろいろ検討しましたが、国の例示としてこういう人なら、という例示でおはなし会をしているボランティアというのがあり、図書館で今度「本の海サポーターズ交流会」を開催し、市内のお話ボランティアが集まりますので、そういった方の中から選びたい。

田中委員長：質問ございますか？ご意見は？
なければ報告の通り了承します。

続いてウ、第二次鎌倉市子ども読書活動推進計画についてご報告を。

松石：館長補佐松石です。皆様のお手元にある「推進計画策定の進捗状況と今後の予定について」とある一枚ものと、「冊子（案）推進計画」を見ながら説明させていただきます。第二次計画の策定については、平成24年1月に策定委員会を立ち上げ、1月から開始した。委員構成を書いているが、市民委員さん3名を含め13名で、図書館は事務局として出席している。9月までに6回委員会を開き、パブリックコメントを取るために、素案を作成しました。

目次をご覧ください。第1章 第二次計画策定に向けて、読書活動の意義、計画の期間や対象を簡単に説明しています。2章では基本的な考え方、計画の目標は根本的なことなので、第一次計画を踏襲している。第二次計画では本を通して人間関係の輪が広がっていくことをうたっている。第3章、ここから長くなる。成果と課題、第一次を検証し、書き込んでいます

第4章21ページから、検証結果から課題を受けまして、どうやっていくか文章で説明している。22ページから。第2次計画でどうしていくか。最後に取り組み事業一覧が32ページから見開きで掲載しています。ここは市民委員さんからかなりご意見

をいただきまして、左側に第一次計画の取り組みを載せ、それを受けて第二次計画を載せた。細かくなっている部分もあるが、左から右に移っていくことが分かるように真ん中に矢印をつけている。継続事業が多いんですが、第一次で出来なかったことが3つある。学校図書館のデータ化、中学校への学校図書館専門員の配置、読書活動がしにくい子どもたちへの取り組みがあまり進められなかった。学校図書館のデータ化は教育指導課とも協議しつつ、どういう形が一番いいのか検討してやっていく。小学校は週3日の専門員が全校配置されたが、中学校はまだで週1日の読書活動推進員という形。中学校への専門員配置は大切な目標。読書活動がしにくい子どもたちへ、取り組みが進められなかった。難しいが新たな課題として取り組んでいきたい。この計画案について、10月20日から11月20日までパブリックコメントを取るようになった。市内の図書館と行政センター、本庁ホール、図書館ホームページでも見られる。事務局が深沢図書館、ファックス、郵送、メールでも受け付ける。ただいまファックスが一枚届いている。まだまだ始まったばかりなので、これから集計して、活かせるところは活かしていきたい。2月までに策定する予定です。

阿曾委員：パブコメとして来たものとその対応について掲載した表のようなものを第一次と同様に作成しますか？

松石：その予定です。

増井委員：前回も、ヤングアダルトサービスが充実していないのではと申し上げた。委員にも入っていない。第二次案を見ても検討中、継続中が多い。大学の教養課程を見ているが、大学2年生まではっきり子どもとを感じる。大学3年生くらいから自我が出て勉強する気になってくる。やはり高等学校までは子ども段階。成長は順番に積み重なっていくので、そういうこと抜きで話しできないのではと考えている。高等学校への取り組み、継続中という文言が多い。

古谷：第一次計画で初めて高等学校と端緒につき、この間で県内公立高校4校の先生方とコミュニケーションが取れる関係になってきた。これを発展させて、公立図書館と生徒さんとの交流の場を率先していきたい。継続中とご理解いただきたい。

増井委員：私学でという話は？

古谷：公立図書館なのでとっかかりを県立高校に求めている。私立高校は徐々に広げていきたい。職場体験などを通して鎌倉女学院、鎌倉女子大の高校などつながりもあるので、これから徐々に私立にもアクションをおこしていきたい。

松石：14ページを見ていただくと、第一次計画のYA講座、イベント、第一次計画で取り組んだことについて書かれている。わたしたちは県立高校から始めているんですが、少しずつコミュニケーション取れるようになってきた。一つずつ、私立もやってくれそうなどところには声をかけたりして、徐々に広げていく。思っていたより高校の反応はいい

いので、継続して取り組んで、今やっていることをコミュニケーションとりながら広げていきたい。

増井委員：教育は連続していくから、ぼくは県立だからとか私立だからとか言うのはどうかと思うが。

古谷：県立にアクションが起こしやすいということで。私立へも輪を広げていきたいと考えているのでご理解いただきたい。

田中委員長：18歳まで連続してちゃんと面倒みているということでご理解いただきたい。

阿曾委員：32ページからの一覧ですが、対比できるのでとてもいいと思います。今日初めて拝見したので、細かいところチェックしていない中での意見だが、私は代表を務めている totomo（注：図書館とともだち・鎌倉の略称）は図書館と3年間の協働事業を行った。その際取り組んだ協働事業としてたとえば1の1に、実施状況が書いてある。この他にも協働事業として取り組んだことがいくつかある。第二次の方では担当が同じで実施はこれからだと思うが、協働事業が終わっても事業はぜひ継続してほしい。

古谷：鎌倉市の計画なので、鎌倉市のセクションを書き込んでいる。ですから担当はそういう形でご理解いただきたい。継続していくには市民協働事業で培ったものを活用していくことはぜひ今後ともご協力をお願いしたい。

阿曾委員：totomo がなくても 自主事業としてやっていっていただきたいとエールを送っている。

あと 34 ページの 16 番、本の紹介リスト、インターネットで配信、こどもみらい課などが担当課から消えているが、図書館独自でやっていくということか？

古谷：その通り。手をわずらわせることなくやっていけるということ。

阿曾委員：おそらく図書館でできると思われてそうされたと思うが、第一次のとき様々な課を入れたのは、図書館がやっていることをアピールできる、他課に協力してくださいねということで図書館の業務がアピールできる、そういう思いを含めて掲載した。その精神は残しておいてほしい。

古谷：こちらの計画の進行管理をするために推進連絡会を構成している。こどもみらい部、保育課、青少年課も入っている。そういったところも含めて連絡会を年に3・4回開催して、いろんな事業の展開をこれからも協力してやっていく。連携は取れていると認識している。

阿曾委員：連携出来ていることが視覚化できるように考えていただければ、という市民の考えだご理解頂きたい。

松石：前と同じように載せていいかと聞いたところ、省いてほしいと言われたところも、反対に加えてほしいと言われたところもあった。例えば、発達支援室とか、41 ページの一番下、世界遺産など、加わっているところもありますので、今後とも連携しながらやっていきたいと思っている。

阿曾委員：42 ページの 26 番、パンフレットの作成について。確かこれも市民協働事業としてパンフレットを作った記憶がある。今回、これについてはどういった取り組みを具体的に考えておられる？

松石：予算がないので、その中で作成できる者を考えている。第一次でも、一番最初のはカラーのきれいなもの、そのあと色上質で作ったこともある。市内の小学1年生全員に配った。今回も色上質で作成し、新一年生に配りたいと思っている。

古谷：第二次子ども読書活動推進計画のパンフレットは自前で作りたい。記念行事もやっていきたいということで、どういったものがやれるか明確にはなっていないが行事も打って出たいと考えている。

阿曾委員：前回の協議会でも言ったが、館長もバナー広告をとるとか雑誌の広告を取るとかおっしゃっていたが、パンフ作成のために市内の本屋さん、子どもの病院、歯医者さんなどから協力いただく方法もあると思いますし、国や県、企業の助成金、基金を利用する方法もあると思いますので、ぜひ考えていただいて予算がないところを突破するよう考えていただきたいと要望します。

田中委員長：ぜひ考えていただきたい。

増井委員：助成金だってなんだって調べないとしょうがない。本庁から言ってこないからじゃなくてネット検索して。公募っていいながら全国展開している。文化庁だって、総務省だって。出せない場合もあるでしょう。でも少なくともぼくが文化庁に電話で問い合わせをしたら「鎌倉出してください」と言っていました。案件出すなかで優秀なものを採用しますと言っている。だからネットで公募している。自然なこと、難しげであるとかできないとかいう感覚は考えすぎです。公募してこなかったらさばきようがない。それは採点して客観評価して決めるわけですから、かなりドライなのは当たり前。競争原理ですから。図書館とこういう話をしていく中で違和感がある、僕とは考え方違うんじゃないかと。助成金だってそう。国の金使ってやってくださいと言っている。落ちたらどうしようなんて考えているかもしれないが、全部受かるわけがない。競争的開発費でも実際そうなんです。ぼくは事実を言っている。

古谷：今のご意見重々拝聴させていただいて活動の一つに加えさせていただきたい。よろしく願います。

田中委員長：ぜひ検討して。

増井：そうではないといわれても実際そうなんです。国、県、財団など、確認して出していただきたい。

田中：積極的に活用をお願いします。

他にございませんか？では第二次鎌倉市子ども読書活動推進計画については報告通り了承で良いか。ではそうする。

ではエの鎌倉市事業評価についてお願いします

湯浅：その前に1つ、すみません。先ほど委員のことでご報告し忘れた。市民公募委員、11名の応募があった。女性が4人、二十代から八十代まで、幅広い応募があったのでご報告させていただきたい。

杉本委員：選考基準は？

湯浅：選考は、レポートで。やり方としましては選考委員会の要項がある。委員としての必要な見識、表現能力、先進性とか妥当性、大まかな項目を作り、着眼点として図書館としての基本的な知識、現状と課題、独善的な考えじゃないか、具体的な提案か、などを着眼点としている。

田中：ではエをお願いします。

湯浅：資料が2点あります。市民事業評価という冊子と、横書きの表、この二つとなります。10月6日に行いまして、事業評価につきまして42ページのところが図書館の運営事業で、図書館のほうから次のページから、事業シートという概要説明を事前に提出いたしまして、46ページまで資料があります。これを出して当日は議論をした。字が小さくて大変申し訳ない。次の結果はホームページに出ているもの。これだけ読みますと図書館管理運営事業の評価結果は不要が1、必要性の再検討が1、国県広域、そういったものに移譲0、要改善9、現行通り3。

改善は改善しなさいということで発展的なものも辞めちゃうものもあり。提言としては、市の図書館としての全体像を明確にすべき。人件費枠を抑制し、開館時間等の拡大を図る。老朽化を複合化を含め検討するように。以上です。

田中委員長：数字の意味は人ですか？

古谷：「人」です。

増井委員：提言の二番目、人件費枠を抑制しサービス向上、これは難しい。困っちゃうでしょう。

古谷：そのもの伝えました。それはさておきながらこういった発表がなされていくことを皆さんにお知らせしたいということでご報告さし上げた。こういったことが10月6日に行われたことをぜひご理解いただきたい。委員の方から評価人に入っていた方があったので、ご様子をご存じかと思うが、人件費枠を抑制し、サービス拡大しろという発言はあの時はなかった。意見の中で、コーディネーターのお一人が人件費の問題があるかもしれないけど、開館時間の拡大は考えていくとおっしゃった。評価人の評価にそのことがずばりそう書いてあるのか見せてもらっていない。事務局にはこういう発表の仕方はないんじゃないのと伝えた。

増井委員：人件費を抑制して開館時間を拡大するなんて、経営学から無理。それを書かれているから驚いた。やめてくれとしか言いようがない。

古谷：私の立場から発言すべきか迷うが、担当事務局には言った。どんなマジックを使ったらよいのかと。

田中委員長：まあそうですね。

阿曾委員：口コミで傍聴人がたくさんいらしていた。1番2番の項目の傍聴者があまりにも少ないので驚いた。図書館と学習センターは椅子を運び込むくらいいらしていた。何人位いらしたんでしょうか

湯浅：その報告まだ来ていない。

古谷：カウントできなかった。申し訳ない。

阿曾委員：今後事業仕分けを受けて、どういう展開が予想されるのか、昨年度も一昨年度も、構想日本に委託されて事業仕分けが行われた。今後の予想される展開、ロードマップみたいなものがありますか？

古谷：担当原局から何も示されていない。鎌倉市としての方針を策定していくんだらうと思う。どういった形の方針か、事前の担当原局から要改善、示された中で今後の課題と私どもはとらえて方向性を定めていくんだらうと考えている。

阿曾委員：今後の市の方針策定の時、原課からは入れるのか？

古谷：具体的なことはわからないが、勝手に決められるものではないと思っているので、情報収集に努め、市長がそういう判断をされないように私どもの意見が反映されるよう努めたい。

阿曾委員：傍聴者数も来ていないということなので驚いている。当日は市民評価人として参加した。その時、傍聴しつつ同時に市民評価人としてのコメントを書くように言わ

れた。そんな大変な作業を強いられたがたくさん意見を書いた。判定人も意見を書いているはず。そういうものが行革推進課のホームページなどでアップされると思うが、わかりましたら一日も早く知りたいのでまたご連絡いただきたい。心配なので。

あと、このコメントの人件費枠をとということと、老朽化施設への対応は、2年前倒しで行われる総合計画第3次基本計画の策定がらみで進んでいると思いますので注視したい。

「図書館の全体像を明確にすべき」という評価については、現在図書館ではサービス計画の見直しをしているところではありますが、一市民委員として、図書館は打って出るというところが感じられなくてやきもきした。市の図書館としてのビジョン、サービスの長期計画にあるところを高らかに謳い上げればよかったと思う、こういう図書館にしたい、図書館法、総合計画、ユネスコ公共図書館宣言にのっとなって、という意識を図書館職員が共有しておられれば予算がなくても人が少なくても、打って出る発言ができたのではと思うのですが？

古谷：図書館のビジョンを、とあの席でも問われた。ビジョンと言われても予算、人員という背景を持っていながら理想像を言うのはふさわしくないと私としては思っていた。まず使われる図書館、使いやすい図書館ということをつつもり、それは抽象的でしょうと言われた、だからどうしたいの？大きくして理想像を述べればいいのだが、現状では責任もって発言できない。そういうことを考えてビジョンが述べられないと言われた。図書館、使われていくべき、使われてなんぼと思いますので、それをやっていくのと、情報発信、これから収集してきたものを発信アピールする、その意気込みを伝えなかったが伝わらなかったと思う。

増井委員：近代史資料室を整備して文献も見ているが、コンテンツがあるがコンテキスト（編成方針）があまり感じられない。蔵書とか、こちら側から発信していく必要がある。いっぱいあるよということしか見えない。理想かもしれないが。蔵書の収集具合、どこに集中しているか見えたら利用のし甲斐がある。鎌倉ならでは。コラボしてやるのかそういうことも考えられると私は思う。資料はいっぱいあってその次どうするのと考ええる。

田中委員長：鎌倉に特化するよう、少し始めるとかそういうことですかね。増井委員のいわれたような。

阿曾委員：そんな答えを期待している。鎌倉ならではの郷土資料とか。評価員もそうだったと思います。

田中委員長：館長からしてみれば何でしょうが。

古谷：近代史資料を収集しているのが一つの特徴。鎌倉というと中世が注目される中で近代を収集している。文化財と国宝館、役割分担をしながら収集に努めている。縦割りじゃないんだからと言われたが、特に特化して近代史をといたが、伝わらなかったか

など。

阿曾委員：その場でも MLA 連携のことについて質問があった。そういうことも今後の事業として展開していきたい。今まで何もやってなかったのと言われた。

古谷：かちんときた。

阿曾委員：市史編纂の仕事も補助執行でされているわけですね。役所にとっては公文書を扱っていたり、近世近代史資料を扱っていたり、国宝館、文化財の紙資料は司書がないので、国宝館の資料は有効活用されていない。アピールがやきもきするくらいなかったかなと思う。方針策定する時、原課の方が参加されるようならもっと強くアピールしていただきたい。市民にとっても大切な共有財産なので。

田中委員長：よろしくお願いします。ほかに？

増井委員：MLA 連携について、言葉が先行している。人的交流が普段から、国宝館、文学館、もありますね、やり方が違う、運営が、とあるが、普段から伝統がなかったら希薄になる。あれやこれや。

古谷：MLA 連携については一昨年、協働事業として国宝館、文化財 3 つ一緒にやらせてもらった経緯がある。当時は生涯学習部という一つの部の中だったので管理職はしょっちゅう顔を合わせる。が、職員は部がかわっても教育委員会の同じ組織の中。連携を深めていくやり方があるので、コミュニケーションをとる体制がある。文学館は指定管理者が入っていて、博物館機能としての文学館は確立されていない。博物館法にのっとっていない。どんなものがあるかという情報は共有したい。芸術文化振興財団が指定管理者として選定される中、図書館と連携していかなければならないと発言したと聞いていますので、私どもも連携してがんばってやっていきたい。

阿曾：文学館の資料は、もともと図書館に寄付されたものも多いし、図書館長が文学館の副館長をされたりという時期も長かったわけなので、連携もしっかりやっていただきたい。国宝館とも。歴史的には図書館の創立が最も古く、お兄さんお姉さんの立場なので、図書館はイニシアティブをとって文化行政を引っ張っていく大切な存在であってほしい。

増井委員：図書館は近代史をやっていくとおっしゃるが中世は？と。国宝館は中世で、そうすると連携しようがない？

古谷：連携の取り方が問題。国宝館資料にどんなものがあるか、何をやっているか、図書館で分かるのがまず一步。国宝館で特別展示をやっていけば図書館ではミニ展示で応援するとか、そういう連携も考えていかれる。国宝館は中世期に国の中心になった国宝、物、研究論文があり、それらを収集している。私どもは近代中心に収集しながら鎌倉に

関するものは収集している。文化財は埋蔵文化財がほとんど。発掘調査の関係は鎌倉時代、中世よりも古代まで進んでいるところもあるところ。中世で止めている可能性も。そういった資料も図書館でも収集している。

増井委員：国宝館で集めた解説書は収集するということ？

古谷：国宝館で発行している書物はいただきながら、こういった本もありますよと紹介できる。国宝館は研究機関なので、資料は基本公開しない形。どう公開していくかという事は連携の中で研究していきたいと考えている。

田中委員長：大事な鎌倉の資産ですのでいろんな面から保存して市民が使えるようにするという事で連携していただければと思う。事業仕分け以上でよいか。では、了承する。

次にオの募金盗難について。

湯浅：9月21日夜10時過ぎ、自宅に警備会社から連絡があり、図書館に侵入者があった模様だと。侵入者があると自動的に警備会社と警察に通報が行く。中に入っている様子。報告から5、6分で来たが侵入された形跡が見当たらないということで電話があった。次の日に窓とか見たが、とくに何もなかった。中央館1階に置いてある募金箱ですが、前は紙が貼ってあり、アクリルがきれいに割れてはめ込んで紙で押さえてあったので、小銭がそのまま残っていたこともあり、気が付きませんでした。23日朝割れていると、お札を盗まれているということで報告があった。前の日くらいに、1万円冊が入っているので、そろそろお札を出さないと、と思っていたが、それがなかったことだった。およそ被害額1万5千円位と思われる。

産経新聞と東京新聞に記事が載った。図書館裏口の鍵が割と簡単なカギだとの指摘もあり、それよりも強固な鍵に取り換えました。それから、募金箱自体はカウンターにあり、紐のようなもので止めておいてあり、閉館後も館全体がカギを閉めるのでそのまま置いてあったが、それ以降事務室のカギがかかるところにしまう形に代えた。

古谷：この件につきまして、大変申し訳ございませんでした。湯浅から説明したとおり、出入り口の鍵が簡単に開くようなものだったということで、防犯上の部分で若干問題があった。警備会社より、侵入して2・3分で出て行ったのではという話があったので、犯人は所在を事前に確認していて、犯行を行い即座に退出したと見られる。その後は鍵を変えて、箱をしまっている。今後、十分管理していく。大変申し訳なかった。

湯浅：基金については、いい方の話もさせていただきたい。totomoさんにご協力いただきまして、市内のお店屋さんなどに声を掛けて基金をお願いしています。今年の4月から始めております。10月18日現在で37万4千円集まっており、今年の予定が50万円なのですが、いいところまで来ている。ありがとうございます。

阿曾委員：どういうふう盗難があつて、1万4,5千円盗られてしまったのか、募金をして頂いた方に本当に申し訳なかつたと心が痛みました。起こつてしまったことは仕方がないので、どのように次に活かすのか氣になつていたので、報告を受けて、鍵の変更と箱を保管されることになつたこと、よかつたと思つています。館長から次の日には大きくお詫び状が掲載されておりましたし、ホームページにもアップされておいて、館長はじめみなさんの誠意を感じました。

募金は市民の皆さんの温かい情だと思つるので、設立に力を尽くしたNPOとしても本当にうれしいと思つる。中央館には「基金始めました」という大きなポスターがある。それで、やつてるんだなとわかるんですが、他館はされておいない。小さなボックスのところチラシが貼つてあるくらい。ポスターを貼るくらい、バナー広告よりもっと簡単にできると思つるので、情報として市民にお伝えするものとして早速やつていただきたいと思つる。このことは7月24日の図書館協議会でも申し上げた。いろいろお忙しかつたとは思つるんですが、ここで発言することの意味がないのかと、徒労感も感じる。寄付団体についてはホームページにアップされておいるが、それも寄付者はインターネットされおない方も多おいので、図書館に見に來られると思つるんです。どうなつてるんだ、と。盗難のお詫び状があつても謝辞がないのは誠意を感じられおないんじゃないかと思つますので、それを早速やつていただきたいと思つる。進まないのはなにか理由があるんでおしょうか。

湯浅：一つに私の不徳の致すところ。ポスター掲示、それから館内にどういつた形で掲示するのかが決めておいない状態。申し訳ありません。早速やります。

増井委員：ぼくは4階におけないかと思つるが。

古谷：募金箱を市役所の4階にといおうこと？安全面として、所管する課のそばに置くのが確実と考えておいる。中央1階2階2つ置いておいて、各館1つ。いろんなどころに置けばいいんじゃないかといおういろんなど意見ある。教育部の方に頼めばいいだけとおおっしゃるかもしれませんが、自分のところの部分でやつていきたいと考えておいる。教育部のカウンターの上、いろんなど書類が置かれておいますので、基金の募金箱があるのは違和感がある。

増井委員：検討していただきたい。

古谷：自分の所でまずやつていく。これからの課題といおうことでいかがでおしょうか。

杉本委員：図書館の募金箱を市役所に置くといおうお話ですが、教育部の中には色々な部署があり、それぞれが何かとやつておいると思つますので、いろんなど部署のが並ぶのはちよつとおかしいかと思つる。

私が氣になるのは警備の方の話。侵入された痕跡がないみたいなき感じだつたが、最終的には裏口の鍵を開けて出入りしたらしいといおうことなんだが、私は警備の方と親しいので話を聞くが、猫が通つてもすぐ通報が行く、風が揺れても機械が反応すると聞いた。そのとき分からなくて、あとで募金箱からお金が取られた、その辺の警備会社とのやり

取りはどうだったのか？そんなのんびりした警備では意味がないのではと思う。

古谷：警備会社をかばうわけではないが、募金箱がカウンターにあることは警備会社はつゆ知らず、元通り形成されて、一見ではわからない。盗難に気付いて警備会社に再度確認をとった。類推すると犯行の時間は2・3分。その間に人感センサー2か所反応しています。カーテンでも、ゴキブリが飛んでも反応するもの。ドアの開閉がなければ、虫かもしれないと考えられるというもの。ドアの開閉があったのはあとからわかった。発報があって、警備も急行し、警察も即座に対応して6・7人が来た。荒らされた跡が一見してなかったなので、被害がなかったのではないかと判断したのではと考える。

杉本委員：その時形跡がなかったのにあとで気付いたということだが、センサーが鳴っているのに入った形跡がないのはおかしい。

古谷：言葉のとらえ方だと思うが、センサーは入ったが、侵入としては認識できなかったということ。入ったかもしれないが、または入ったけど、それほど被害がなかったという意味合いのこと。

杉本委員：募金箱以外にも、他にも端末機器とか、本とかも狙われる可能性ある。裏のカギを直すだけでなく、対策を立てられた方がいいんじゃないかと思う。

湯浅：私もいわゆる誤作動ですかと聞いたんですが、いや、そうでも、という回答で誤作動とは言えない。入ったあとはあるんだが、形跡がなかったのでと言われた。

古谷：先ほどもご説明しましたとおり、鍵が脆弱だったので、ボタンを押して締めればしまるもの。鍵をかけて外に出れば密室はすぐ完成されてしまうので。

阿曾委員：個人情報も機器に入っているし、貴重な近代史資料もあります。また、津波や地震などの防災の観点から考えると地下書庫なので、イザというとき資料が水浸しになりかねない。防災や警備等、危機管理体制を再構築されるいい機会なのかもしれない。

増井委員：職員通路側のあそこのトイレ、よく変な人がいる。図書館の人は3階しか使わないかもしれないが。裏口は誰でも使えるが、裏口は職員しか通れないようにした方がいいのではないか。万引きの話も出たが、万引き対策よくある。やられないようにするということ。トイレだけ入って出ていく人もいる。ものすごくルーズというかな、図書館ってルーズなんだという感じがある。おかしいと思う。

杉本委員：私は裏口は利用しないのですが、あの出入り口は開いているときはいつでも開いているんでしょうか？知っている人は使いますね。

増井委員：脇が甘い。

湯浅：喫煙所を外に開設している状況なので、本来的に言うとは職員通路としていますが、開けている。

杉本委員：たとえば合鍵持っていて、緊急の時鍵を貸してくれるとか。職員がカギをもって出ることとは？

増井委員：逗子の図書館にもよくいくが、あそこはいろんな施設があり、ガードマンが巡回している。人間が全て善人であるという前提はない。悪いことする人がいる。

阿曾委員：図書館振興基金に戻るんですけど、今年もファンタスティックライブラリーをされるということで色々な催しを企画されていて、楽しみにしている。例えばそこで謝意を述べるのはどうですか。湯浅さんとか、totomo も一緒にまわっているが、館長自らいらしていただけるようであれば、招待状を出すなどしてファンタスティックライブラリーの交流会に寄付者をお呼びして一年に1度、交流の場を作るというアイデアはどうかと思います。アメリカの寄付文化のように。それで気持ちが伝わるのであればいいアイデアではと思う。

-事務局相談中-

阿曾委員：今回からでなくても、来年からでも。検討してください。

田中委員長：防災のこと、まとめて見直されるようにお願いしたい。
以上のこと、基金については以上で？では了承します。
ではその他についてお願いしたい。

湯浅：前回、増井委員からお話が出ていたので報告しないといけないんですが、蛍光灯光量が暗いのではないかというご指摘があり、調べましょうということがあった。震災がありまして、そのあとでかなり蛍光灯を抜いています。抜きすぎて暗くなるといけないので、閲覧室の必要な光量を、光量計を見た上で、決まっている明るさでそれでいいのかということもあるが、抜くところを変えたり、暗いようでしたら考えたいと思っているが、数字的には大丈夫だということだけお伝えしたい。
その他についてはそれだけです。

田中：よろしゅうございますか？

増井委員：あそこの近代史資料室の横のテーブルですがはっきり見たいとき、照明が手元にあればと思う。細かい字がいっぱいあるのでしんどい感じがする。個別のが全部いるかは別として。活字が結構大きければ読めるが、小さい奴もあるので。やってもらいたい。

古谷：2階の閲覧室ですね？近代史資料室ではなくて。

増井委員：郷土資料室。あの横の机のところで読む時、手元はつらいことがあるという事実を言っている。試されたらわかる。現実の話をしている。

田中委員長：個別に見ていただければというご意見。全体的には満たしていると思いますが、個別のものを見るときということですね。

阿曾委員：読書灯みたいなものですか。新しい図書館に行くについてますよね。

古谷：厳しいですが。

(4) 答申

図書館サービス計画の方向性と方針について
—田中委員長、答申読み上げ 答申本文—

田中委員長より、古谷館長へ答申手渡し。

田中委員長：よろしく願いいたします。

古谷：ありがとうございます。

田中委員長：引き続きその他をお願いします。

古谷：今回、任期期間内最後の協議会となります。活発なご意見をいただき、誠にありがとうございました。今後の図書館運営についてご意見あれば、お一人ずつぜひ頂戴したい。

田中委員長：では増井委員から。

増井委員：何かとしゃべりすぎましたが、経営ということで意見を言わせていただいた。ここは予算がついてこそなんですが、資金は多様化する時代です。ネーミングライツの話もでていたが、予算が削減傾向にあるからできないという答えがなくなるような気がする。いやしい、教えないを前提としましたし、ITベンチャー、起業する方も。積極性、ファイナンス、ディスクロージャー、ディスクマネジメントをしていく。公務員だから仕方ないとあるかもしれないが、マネジメント論は国もそうですし、正々堂々とやればいい。人員削減して時間延ばせなんていうのには即座に反論しないと。やさしいとか楯ついたらまずいとか言わずに、できませんと言う。つけこまれますよ、そう僕は思う。僕の性格が異様かもしれないが現実はそう。サービス計画は予算、人を獲得するためのもの。奥ゆかしさを出してみたって損するだけ。あつかましいという議論ではない。はっきりしといたほうがいい。言葉が過ぎましてご迷惑かけました。ありがとうございました。

阿曾委員：言い忘れたことがあるので、この期に及んですみません。先ほどサービス計画の答申をさせていただいたわけですが、これは基金と同じようにHPや館内掲示をすぐにして頂きたい。前回の議事録が配られて、とても役に立った。リアルタイムで打ってくださる方がいらっしゃるからだと思うが、今後も大変でしょうがぜひ続けていってほしい。そしてホームページにアップしていただきたい。それでこそ市民全体の図書館協議会になっていく。協議会が形骸化されないためにもぜひお願いしたい。

館内の広報活動も足りないが、プレスリリースそのものがされていない。基金のことなどお願いすれば『鎌倉朝日』などすぐに記事が出た。地域情報誌こそ大事に広報活動をして欲しい。今回は totomo でプレスリリースしましたが、公的な立場でいらしたら役所のプレスにすぐリリースしていただきたい。

協議会には、一番最初は15年くらい前、その当時、学識経験者ということで前任から引き継いできた。学識経験はないが、市民目線で話してくれればいいと、totomo は圧力団体じゃなく、応援団体ですよということを入れていただいた。市民団体から市民が協議会委員として入ることはそれまでなかったの、当時の館長のご英断だったと思う。totomo の代表を2期務めた後、代表が変わった。「代表が変わりますので、代表として引き継ぎたいんですができますか？」と当時の館長にお願いしたら、ぜひそれでということで引き続き協議会に入った。たぶん学識経験者、社会教育団体の枠づけで入ったと思う。その後、4人目の代表として再度協議会に入った。図書館には関連団体が十数団体あるので、視聴覚協会、点訳奉仕団とか、順番に入ってもいいなと内心思っていた。

今回、家庭教育に資するメンバーが入らなければならない、公募枠も必要だということで、15・6年かかわらせていただいた委員を退くことになったと理解している。今日は協議会委員を務めた totomo の先代代表や先々代代表も傍聴人として参加している。長い間ありがとうございました。12月から始まる市議会でも、審議会、形骸化されているんじゃないか、1万円もの報償費は高いんじゃないかとか、言われています。是非、形骸化しないように、市民と協力できるように、ホームページにアップして内容を視覚化し、市民みんなの協議会であるように希望している。田中先生、ぜひ今後ともよろしくお願いいたします。

杉本委員：私は社会教育委員という立場で入らせていただいている。前から申し上げたいと思っていましたが、阿曾さんはほんとに熱心で、市民目線でわたしなんかついていけないほど情熱があふれていて勉強させていただいた。質問ですが、協働事業がなくなって、継続されるのか、それはなくなるのか、伺っておきたい。この世の中の流れとして、社会教育委員とか、社会教育がなくされる方向に行っている。生涯学習がなくなる方向、大変残念なことだと蛭田先生などもおっしゃっている。教育委員会はいじめ問題でクローズアップされている。2年前、社会教育研究発表で発表する機会があり、長年図書館でお世話になったので、図書館をテーマにした。それまで社会教育で図書館をテーマとして取り上げたのはなかった。わたしが初めて取り上げて、図書館で社会教育っていう位置づけなんだとか、鎌倉の図書館って歴史があるんだねと、反応があった。図書館が社会教育にかかわっている人の中でも違った認識なんです。社会教育そのものが市民にこういうものだという、存在感、意味、位置づけ、アピール、示していけるのか、

わたしの立場からものすごく大きな課題だと思っている。予算がないと残念なことあると思うが、市民が盛り上げていくには、PRなのか、社会教育委員の力不足もあるが、やり方、こういうもんなんだ、本借りるだけでなく生涯学習の位置づけ、拠点として、まちづくりの一環としての図書館としての位置づけを確立していただきたい。

熱心な市民が多くいらっしゃるし、知的レベルが高いのだから、今後に期待します。

古谷：協働事業そのものはいろんなところとやっていきたい。totomoとも取り組んでいきたい。過去20・21・22年度、市民活動部というセクションから、市民協働事業をやりませんかと提案があり、totomoとスタートした。それが協働事業と言われているが、私どもは市民とタイアップしてやるのはすべて協働事業と考えている。りんどう、視聴覚協会、totomo、点訳奉仕団、その他模索していきたいし、いろんなところと協働事業をしていきたい。ボランティア活動で読み聞かせをしてくださっている方たちと共同体として読み聞かせ講座とか、それも市民協働事業の一つとしてとらえている。そういった形で進めていきたい。

田中委員長：私は大学の図書館に席があり、公立図書館とのタイアップということで、大学と地域の連携ということでそういった面から参加している。大学も変革の時を迎えて、第三者評価とか、社会に貢献することも求められている。大学図書館は大学の学生に役立つのが第一義、教員の研究を支援する、という二つの目的を持って日々サービスしている。現在研究に資するところは論文とか雑誌、図書を蓄積してできるだけタイムリーに要求があったときに提供できるようにする。世界各国から取り寄せるということを行う。学生に必要な資料をそろえておいて提供する。今までそれで続けてきたが、現在よく言われているのは勉強する場としての図書館、滞在型図書館、ラーニングコモンズです。そのためには、今までのものを蓄積してタイムリーに提供するだけでは済まない、場所も、人も（教える人）大学院生、司書、トータルに学生の学習を支援することが必要。今日諮問したサービス計画ですが、市民の生涯学習に役立つ、市民と一緒に作る居心地の良い場所を作る、かなり似てきているかなと思って読ませていただいた。大学という目で、市の図書館に意見を貢献できればと思ってきた。以上です。

古谷：貴重なご意見をありがとうございます。今後とも微力ではありますが、私も鎌倉の図書館を盛り立てていきたい。見守っていただければと思う。今後ともご指導いただければということをもちまして、お礼の言葉とさせていただきます。

田中委員長：これで図書館協議会を終わります。ありがとうございました。